

今日の日本 明日の世界

Vol.45
新型コロナで
再確認できた
日本の強味を生かそう



1. 一国のまとめりって何？

私は20年程前にデンマークで勤務しました。デンマークからオーストリアのウィーンに飛ぶと、距離は東京と札幌ぐらいのものなのですが、国境があると航空券も東京・札幌よりも高かったし、空港では外国人の私にとってはパスポートコントロールもあり異国になってしまふのです。EUが一つと言いながら日本と比べるとやはり異なる国の連合なのだと感じました。

欧州の経済・政治統合を図るEU

めとしたインフラ整備に当たること、生産力が増え、人口も倍以上に増加し、その増えた人口が今までの時代には見られない産物の交流による豊かな消費文化を生み出してきました。一方で戦争を支えていた武士などが学問を担う人材に転換することで学術が発展し、それがまた生産力向上や消費力向上に寄与する良き回転が図られた時代と言えます。経済力の高まりを支えられて街道が整備され人や物資の往来が増加し、それぞれの藩同士の競争で、それまでは主に京阪地区に限られていた酒・醤油・絹や綿の織物、陶磁器など、現代各県を代表する地場産品が産まれ日本全体が均一に発展しました。国民の識字率が女子も含めて向上し、歌舞伎を始めエンターテイメントが大きく花開いた時代であるなど、今後の我が国の産業育成にも指針を与えています。

EUの場合は20世紀の2度にわたる世界大戦で今のエリア全体で戦争が展開したことが、一国同胞観の形成に足を引っ張る形で効いているのではと懸念しています。加えて例えばイタリアが統一国家になったのは19世紀後半で、それまでは国内の小国が戦争を繰り返して、今も南北問題を抱えているように、それぞれの国内でも地域間の戦争が絶えなかったのがEUです。アメリカも19世紀後半の南北戦争で多くの犠牲を出しました。日本でも戊辰戦争で争つ

が未だ一国になりきっていないこと、で好ましくないとされる事象が、今回の新型コロナ禍で起きました。イタリア・スペイン・フランスでの感染による死亡率が急速に高まった一方、ドイツ・オーストリアのドイツ圏は死亡率が格段に低い状態に留まりました。ドイツはフランス・イタリアから一部患者の受け入れで協力はしましたが、イタリアなどの目線から見れば、これはEUへの大きな不満として残るのではないのでしょうか。ドイツは1990年代初頭にはGDPに対する輸出額の比率は20%以下でしたが、今や40%を超えています。1993年に生まれたEUとの交易のおかげで輸出比率が倍増し、より輸出で儲ける経済構造に変化しているのです。これは統一通貨ユーロでEU全体が一国扱いのために、経済力の弱い国が自国の通貨安で産業競争力の調整ができないことが大きく影響しています。このため産業競争力がドイツに比べ劣るイタリアやスペインが財政緊縮せざるを得ず医療費を削減、病院含め公共サービスの縮小していったことが、今回の新型コロナ禍で死亡率を増やす要因になったと考えられます。にもかかわらずその交流恩恵を受けている国々の窮状と比較し、ドイツ圏のみ死亡率を低く抑えている結果が起きていることにEU内で不和が起きないか心配です。その意味で現在打ち出されている欧州復興基金をはじめ

た山口(長州)と福島(会津)のように、同胞が敵味方に別れて戦争を行うと、100年を越えても恨みが消えることが難しいようです。アメリカの場合は、これに加えて今回の全土に広がるデモの発端となった人種間の軋轢もあります。

3. 災害に強い国力形成には地方分散

欧米と日本とを国として比較することはやや乱暴かも知れませんが、日本は全員が同胞であるとの国民性を持つていることを、欧米にはない強みと再認識し生かしていかなければなりません。新型コロナ災害を機会に、その特性を生かした国づくりを考え直すときです。災害が多く南北で天候の影響も異なる日本列島です。新コロナに限らずさまざまな災害に対して、国家としての力、柔軟性・持久性が大きくなることを目指さなければなりません。そのためには、人々ができるだけ国土に均等に分散して住むことです。というのも今回緊急事態宣言の対象になったのは主に首都圏・阪神圏からでした。大都市への一極集中が新型コロナ禍ではもろさを見せた形になりました。予想される巨大地震対応のためにも、均一同胞国家であることを基本において、地方分散の形を急ぎ進めていくことが必要です。ではどのような形が良いのでしょうか。同胞意識の下、各地方の力が切磋琢磨することで、国全体がバランス良く

めとする新型コロナ禍復興施策の成否に注目です。

2. 250年の平和がもたらした 貴重な同胞観

EUのような地域毎の死亡率格差が日本で起きたらどうなるでしょうか。多分日本中が一丸となってイタリアのような状態になった地域を救うでしょう。日本もEUの2国間の距離以上に南北の広がりがあり「お国はどちら？」と明らかに旧国境を意識した言葉は使いますが、EUと異なり一国同胞感を共有できるのはなぜでしょう。文化・風土は歴史によって形成されます。温故知新で探ると、その答えは250年以上の平和をもたらし続けた江戸時代にあると言えます。それまでは越後の上杉謙信が甲斐の武田信玄に塩を送った話が残るくらい、越後・甲斐といった旧国々の中と外とは一國意識を共有できない時代が、日本史の中で長く存在しました。それでも周りを海に囲まれて日本は各地の産物の交流が図られることで、米を主食とする食文化、着物形式の着衣の文化、茅葺きか瓦葺根の家の住居文化は共有する国でした。そこに江戸の平和な時代が250年以上続き物資や文化の交流が更になされた結果、文化の共有に加え同胞意識を共有する国家ができあがりしました。江戸時代は平和の訪れとともに、戦国時代は戦闘に割かれていた要員が新田開発をはじめ

栄えた江戸時代を参考にするのが良いのではないのでしょうか。江戸時代は、当時の全人口3000万人のうち30分の1の1000万人が江戸に住んでいたことを考えると、現代日本の人口は1億2000万人。その30分の1で400万人程度。これを超える現在の東京の人口が地方に住んでも快適なようにインフラなどの整備を図ることが、新型コロナ禍から復旧のための経済施策に盛り込まれることを期待したいです。

濱田 敏彰

Toshiaki Hamada

1955年大阪市福島生まれの東京日本橋育ち。東京大学法学部を卒業し、大蔵省(現財務省)に入省。政府経済見通しの作成に始まり、銀行検査官、税務署長、大阪税関長、大臣官房審議官、他省への出向ではジェトロコペンハーゲン事務所長、地方分権推進委員会事務局参事官、東日本大震災の際には消防庁審議官を経験。2015年税務大学校長を務め退官し、現在は経済評論家、関西大学客員教授。

